

## 学校、クラブ、代表レベルにおける キャプテンシーについて

秦 修 司

### 目 的

David Frost はその著書「Captaincy」において、学校チームから代表チーム、遠征チームのレベルまでのキャプテンのなすべき役割について考察している。

本研究では、David Frost の著書「Captaincy」を中心に、学校、クラブ、代表チームにおけるキャプテンシーについて分析、検討することを目的とする。

### I 学校チームにおけるキャプテンシー

学校チームのキャプテンを務めるのは、新しくキャプテンになったプレイヤーにとって極めて有益になり得る。キャプテンの任務により、責任についての真の意味を知る最初の場合を得ることができ、相互依存の共同体について理解、認識することができるであろう。キャプテンはコーチングに携る教師と密接にやっていたいかなければならないのであるが、このことはキャプテンに教師がみずからの責任においてなす自己犠牲を認識させる助けとなる。従って、学校チームのキャプテンを務めるのは少年の心を拓ける重要な動因になり得ると考えられる。

しかし、学校ラグビーのキャプテンは、キャプテン自身はみずからの時間とエネルギーの多くをその任務に費やさなければならないことを認識するであろうし、認識すべきである。一般的に、キャプテンがその任務に没頭

すればする程、それによって得るものも多くなる。コーチはキャプテンと、チームの仲間の競技能力だけでなくプレイヤーがクロス・ゲームにおけるストレス、プレッシャーの下でどのような反応を示すかについて話合うことを望むであろう。このことはコーチと密接な関係を持つことに通じ、その少年に教育の真の意義についての洞察を与えることになるであろう。

このことから、学校ラグビーでのコーチの役割は重要なものであることが理解されるだろう。というのは、コーチはキャプテンに深く影響を及ぼし得るからである。チームが成功するには、コーチとキャプテンの双方が互いに密接にやっていたいかなければならず、コーチはキャプテンに、試合の最中に戦術を自由に変更してよいということをはっきりと言っておかなければならない。

キャプテンを選ぶ場合、多分に学校のレベルは他のレベルよりも、競技能力の秀れたプレイヤーがキャプテンになる可能性が大であろう。そのプレイヤーが天性のリーダーである可能性があるのも首尾よくいくかもしれないが、そういかないこともしばしばあると思われる。有能なプレイヤーは自己のパフォーマンスに関心を持ちすぎてチーム全体の利益のために時間を費やすことができないかもしれないからである。

同じように、学校ラグビーでは先シーズンから残留している最上級のプレイヤーをキャップ

テンにする傾向が必ずと言っていい程ある。これは経験あるプレイヤーがチームの残りのプレイヤーに尊敬されているという点で、当初の利点はあるだろう。しかし、長期的に、経験が天性の指導能力にはとって代ることができない場合には最も不適な選択になり得るので、当然のごとく上級生のプレイヤーをキャプテンにすべきではないであろう。

この場合、問題が生ずる。というのは、先シーズン以来残留している上級生がキャプテンに選ばなければ、その少年に相当のダメージを与える可能性があるからである。ある場合には、若いプレイヤーの自尊心にダメージを与えると、冒険をおかすよりも、あまり人を奮い立たせることのないキャプテンで間に合わせておく方が適切でさえあるかもしれないであろう。理想的には、学校のレベルの場合、生得的なリーダーというのはファースト・チームに入るかなり前から注目しておき、そのプレイヤーがキャプテンの任務の遂行者であると確実に承認されるような位置に導いていけるようにしておくことであろう。

学校のチームを試合観戦に連れていくことが可能であれば、キャプテンをコーチのそばに座るか立たせておいて、双方のチームの長所や短所、効果的な攻撃法やその成否について話合うのが適切であり、このような方法で、試合観戦するのはラグビーの知識や真のキャプテンに必要な判断力をつける最上の方法であろう。それは、表面的には面白くはないかもしれないが、長期的には、極めて有益なものになり得るであろう。

学校ラグビーのキャプテンにはなすべき仕事が多岐にわたるが、新聞等の切り抜きを収集したり、試合の日程を組むといった責任があるかもしれない。又、コーチからチームの選手選考について助言を求められるかもしれない。コーチからどれ位の助言が求められるかというのはコーチの心構えによるが、有能なコーチはキャプテンと協力してやっていく考えを持

っているもので、キャプテンの助言はかなりのウエートを占めるであろう。

チームの過失についてであるが、キャプテンは次のことに注意しておくべきである。過失を責めることによってチームのパフォーマンスを低下させるよりも、叱咤激励によってチームに熱意を持たせることである。このことは自明の理に聞こえるが、過失をおかしたプレイヤーをそのまま用いることをせずに、非難してメンバーから外すことは極めて容易であろう。例えば、キャプテンがフォワードのプレイヤーであって、ボックスが何か過失をおかした場合、ボックス全体を非難しても効果があるとは思われない。スリークォーターの位置のとり方が適切でないかあるいはハンドリングの失敗のために25メートル後退したために、やっとの思いでボールを獲得したフォワードが味方ゴールラインの方へ戻らなければならないにしても、フォワードであるキャプテンがボックスを非難し、欲求不満をぶっつけても効果がありそうにはない。ボックスはフォワードを最悪の状況に陥れたことを知っているのも、すでに十分なまでに傷ついているのである。キャプテンは状況が不利になっておれば、ボックスのリーダーにすばやく言葉をかけて、その欠点を矯正する方策について示唆すべきである。

逆の場合にも、同様のことが言えるであろう。つまり、キャプテンがボックスのプレイヤーである場合、味方フォワードが相手のプレッシャーによってセット・ピースから規則的にボールを供給することができないために、フォワードにもっとボールを獲得するように大声をあげて要求しても効果があるとは思えられない。フォワードはボールをボックスに故意に供給していないのではなく、ボール獲得に最も懸命に努力しているのがフォワードであることを理解せず、フォワードほどはハードワークしているとは言えないボックスであるところのキャプテンがフォワードに不平を言い始めれば、フォワードが誠心誠意、心から献身し続け

ることはほとんど望めないだろうし、キャプテンはフォワードからの尊敬を失ってしまうであろう。どのようにしてフォワードの力を別の違った方向に沿って効果的に持っていくかフォワードに理解させる努力をして、そのことについてフォワードのリーダーに示唆することが重要であろう。

キャプテンは試合開始前に、不測の事態が生じた場合のプレイヤーの交替について考慮しておくべきである。たまたま起り得るように、プレイヤーが負傷のために10分程退場したら、そのプレイヤーが抜けている間どのようにチームを再編するのか？、それには極めて明確な選択が考えられる。例えば、プロップが抜けたら、ロックの1人をフロント・ローにあげ、No.8をロックにあげることができる。

同様に、フッカーが抜けたらプロップの1人をフッカーにして、ロックをプロップに、No.8をロックにあげることができる。No.8が抜けた場合、単純にNo.8のポジションを空けたままにしておらずにフランカーの1人をNo.8につける必要が生ずるかもしれない状況が二、三ある。フランカーが抜けた場合、ある状況ではNo.8をフランカーにしてスクラムを組ませる必要があるかもしれない。

・スクラム・ハーフはスペシャリストのポジションであるので、不測の事態が生じた場合、多分にすべてのポジションの中でも埋合せるのが最も難しいポジションであろう。普通、一般的には、フランカーを一時的にスクラム・ハーフをやるように命じるのであるが、賢明なキャプテンであれば、事前にチームの中に以前にスクラム・ハーフを務めたプレイヤーがいるかどうかについての予備知識を持っているものである。スタンド・オフ、センター、ウイングあるいはフル・バックのプレイヤーでさえスクラム・ハーフの経験がかつてあったことを知っているかもしれない。スクラム・ハーフは埋合せるのが決して容易なポジションではないので、ほんの一試合か二試合しか経験していな

いにしても、スクラム・ハーフの経験があるプレイヤーをスクラム・ハーフにするのが適切であろう。

不測の事態が生じた場合、スタンド・オフを埋める一般的な方法は、センターの1人をスタンド・オフにして、そのセンターの抜けたあとをウイングでカバーし、フランカーをウイングに下げることであろう。しかし、これがそのような状況処理する際の唯一の方法ではない。例えば、ウイングが過去にスタンド・オフでプレイしたことがあれば、そのプレイヤーをスタンド・オフにして、そのあとのウイングにフランカーを下げれば、センター間のコンビネーションが崩されずに済むであろう。

バーバリアンズのチームは1979年のライセスターとの定期戦でこれを行っている。ウエールズのスタンドオフの Gareth Davies が脚の負傷で退場した際、イングランドのウイングの Mike Slemen をスタンド・オフにしている。

センターをスタンド・オフにあげる場合、ウイングをセンターに、フランカーをウイングに下げる必要は必ずしもなく、それは、出場しているプレイヤーの能力に依存している。例えば、1958年、ロンドンのトウィッケナム・ラグビー場で行われたイングランド対オーストラリアの試合でイングランドのスタンド・オフの Phil Horrocks Taylor が試合中に退場した際、イングランド・チームのキャプテンの Eric Evans は Jeff Butterfield をセンターからスタンド・オフにあげたが、そのあとのセンターにウイングをあげずに、フランカーの Peter Robbins をセンターに下げている。これは、Robbins はボール・ハンドリングが極めて上手であったので、賢明な方策であると言える。試合は右ウイングの Peter Jackson に非常に偉大なトライの結果により、イングランドが9対6のスコアで有名な勝利を得たのはこのフォーメーションであり、しかも、これはインター・ナショナル・ボードが1975年に選手交替を認める以前のことである。

ウイングが一時的に欠場した場合、あまり多くの選択をとらずに、フランカーをウイングに下げるのが適切であろう。しかし、フル・バックが欠場した場合の処置にはいくつかの方法が考えられる。多分に、最も一般的な方法というのは、センターをフル・バックに下げ、ウイングをセンターにあげ、フランカーをウイングに下げることであろう。しかし、No.8をフォワードからフル・バックに下げるという方法が考えられないこともない。その決定は、ゲーム展開の方法とチームのすべてのメンバーの能力によるであろう。例えば、バックスのオール・アウトの攻撃を意図しておれば、ウイングをフル・バックに下げ（フランカーをそのウイングのポジションに下げる）、フル・バックのアタッカーそしてカウンター・アタッカーとしての役割においてそのフル・バックのスピードを生かすのが効果的であろう。重要なのは、キャプテンは試合開始前に、不測の事態が生じた場合のプランをたてておくことができるぐらい充分に、味方プレイヤーについて知識を持っておくことである。

## II クラブにおけるキャプテンシー

クラブのキャプテンシーは、2、3の意味で最も難しいタイプのキャプテンシーであろう。フィールドの外での仕事の手伝いはクラブの他の役員がやってくれるが、キャプテンはクラブ内の担当量の仕事をしなければならず、それには極めて多くのエネルギーや忍耐力が要求される。クラブのキャプテンはクラブを運営する諸々の委員会に出席しなければならないし、チーム選択に関しても重要な役割を果たさなければならない。同時に、プレイヤーから諸々の委員会に出席した際、彼等の代弁者であることを期待されている。

特に、チーム選択に関してはキャプテンの仕事の中に人の管理運営の問題が入ってくるであろう。選手選考からはずれたプレイヤーというのは、自分が思っている程には有能でないこ

とを認め難いことが往々にしてあるので、キャプテンはこの類の状況の処し方についての知識が要求される。例えば、選手選考からはずれたプレイヤーに最初にそのことを伝えるのが重要である。キャプテンにはクラブ内の状況、特に選抜委員会内の状況について、すべてのプレイヤーにたえず情報を与え続けなければならない。クラブがよい成績を収める上で、キャプテンが他のプレイヤーとうまくコミュニケーションをとることが重要である。

キャプテンはクラブの下位のチームに関心を示さなければならず、ファースト・チームの15名のプレイヤーだけでは充分でない。クラブ内の他のチームにクラブ全体として重要な一部であることを認識させるのが重要である。キャプテンは他のチームの練習に参加するのも重要である。それによって、キャプテンは手本を示すことができるばかりでなく、すべてのプレイヤーについての知識を得ることができるので、そのようにして、クラブ全体に利益とか自信の感覚というものをつくることができるであろう。キャプテンは優先順位の第一にプレイヤーの利益、福祉をあげなければならない。

代表チームよりクラブのチームの統率の方が容易な点でその1つにプレイヤーたちがお互いのプレイそしてチームにとって何が必要であるかについてよく認識しているということがあげられる。

クラブのレベルのキャプテンを務める利点の1つに、キャプテンが少くとも2、3シーズンはチームに所属しているので、その2、3シーズンのうちにチームの長所や短所がどこにあるかについての知識を得ていることにある。先シーズンのうちに、前任のキャプテンよりは有用な人材をより効果的に生かすことができる方法を得ておいたかもしれない。このようなケースがキャプテンがチームに自分の意見を述べる機会であり、コーチは多分にそれらのことを試みさせてくれるであろう。キャプテンは他のプレイヤーが述べることを、特に前任の

キャプテンが述べることに充分、耳を傾けるくらいにいつも謙虚な態度をとるべきであろう。必ずしも、彼等の助言どおりにやる必要はないが、彼等が述べることに耳を傾けるくらいの好意を見せるべきであり、適切な助言であれば、とり入れるべきであろう。

キャプテンとしてのシーズンを順調にスタートするには、シーズンに入る前の練習が非常に重要である。練習をすべて時間どおりに行い、他のどのプレイヤーよりも一生懸命に練習することによって手本を示すべきである。たとえばコーチの言動のいくつかに賛成できなくても、コーチとうまく協調していかなければならない。残りのプレイヤーに、キャプテンとコーチは協調してやっていると感じさせることが重要である。コーチに同意することができなければ、プレイヤーの前でなく、あとでプレイヤーのいないところでコーチと話合うのが適切である。

練習に参加しないプレイヤーは土曜日の試合には出場できないといったシーズンの規則をつくるのが考えられるが、その場合、練習に参加しない有能なプレイヤーを特別待遇すべきでない。何名かの有能なプレイヤーに定期的な練習を免除しがちである。というのは、それらのプレイヤーがそのチームで練習しようとしまいと、とにかく、上手にプレイすることを知っているからであるが、チームの雰囲気適切にしておくためには、規則に例外を認めるべきでない。チームの残りのプレイヤーは、個人によって、特別待遇に対し軽蔑の念を持つので、優秀なプレイヤーがいる不満一杯のチームより優秀なプレイヤーはいないがまとまったチームにするのが適切であろう。クラブのメンバーが広範な地域から構成され、通ってくるのが困難なためすべてのプレイヤーを練習に規則的に参加させるのが難しいということが事前にわかっておれば、その場合、規則第一主義にすべきではないであろう。

各々の練習計画についてであるが、事前に

キャプテンとコーチがともに作成すべきで、コーチは練習の指導にあたるが、キャプテンはチームの残りのプレイヤーと練習を行う。コーチが、特にバックスの指導にあたることを要望すれば、その場合、キャプテンがフォワードのプレイヤーであれば、キャプテンがフォワードの練習の指導にあたることができる。キャプテンがバックスのプレイヤーであり、コーチが特にフォワードの練習の指導にあたることを要望すれば、キャプテンがバックスの練習の指導にあたることができるのはもちろんのことである。

試合におけるフィールドでのプレイヤーの形勢は試合前のチーム・トークでキャプテンによってなされる動機づけに依存している。チーム・トークの基本的な特徴は、プレイヤーを集めて再度、試合の準備のためその週の間に、検討してきたすべての要点を思い出させることである。チーム・トークは、相手の既知の長所や短所をすべて考えに入れて、相手の短所を攻め、相手の長所に対する味方の防御法を練習したことの最高点である。

キャプテンとして、レフリーと良識ある関係を結ぶことが重要である。レフリーはゲームをコントロールするので、レフリーと敵対するのは全く無益なことであろう。レフリーを部外者としてではなく、ゲームの一部として見なすべきである。レフリーは極めて困難な任務を果たさなければならないこと、そしてレフリーは最善を尽くしていることを認めなければならない。その最善というのが期待程にはよくないとしても、レフリーがゲームをコントロールしているので、それを受入れなければならない。

それは、試合後、レフリーのもとに行って、レフリングから生じた問題点について論議することはできないと言っているのではない。プレイヤーが他のプレイヤーとゲームについて話合うことからラグビーを学ぶのと同様に、レフリーは他のレフリーだけでなく、レフリングしたプレイヤーと要点について論議することに

よって学びたいと望んでいるだろう。試合後のこの種の論議から、レフリーはレフリングを向上させるのができ、プレイヤーはレフリーと話合うことによってゲームの向上を測ることができる。

キャプテンとして、フィールド・オブ・プレイでのレフリーの決定に従わないプレイヤーは如何なるプレイヤーでも厳しく戒めなければならない。レフリーの決定に従わないため、レフリーは自陣でゴールポストの 10 m 前で相手にペナルティ・キックを与えるかもしれないが、味方プレイヤーの愚かな行為のため 3 点を失うことになる。それとは別にキャプテンはチームの長として認められ、もともとプレイヤーのフィールドでの行為に責任があると考えられている。味方プレイヤーによるどんな野蛮な行為でも、レフリーとキャプテンの関係を危険に陥せるので、ゲームの重要なパートである楽しさが失われてしまうであろう。

明確に理解できない反則をおかしたためにペナライズされ、何が原因でのペナルティであるかキャプテンとして本当に理解できなければ、その場合はレフリーに質問して構わない。しかし、あたかも権利を主張するかの如くレフリーのもとに行くべきではない。その理由について問合せることであり、命令的要求を行ってはいけない。

クラブのキャプテンは相当量の時間、そのキャプテンとしての任務に費やさなければならないであろう。Roger はゴスフォース・クラブのキャプテンとしての時代の週の日程について、次のように、つまり、「7 日のうちの 6 日はクラブのために自分の時間を規則的に費やされ、唯一の自由な日は水曜日だけであった。水曜日も、参加すべきカウンティのスカッド・セッションがよく行われた。」と回想している。

多分に、クラブのキャプテンには日曜日でさえ自由にならないだろう。クラブの場合、選抜委員会は日曜日の午前中に開催されるのであるが、平均して約 1 時間は続くだろう。議題は

次の試合のファースト・チームの 15 名を選考する問題だけでなく、クラブのすべてのチームが、昨日どのような状態で試合を行ったかについての報告とプレイヤーを上位のチームに昇格することについての示唆がある。ファースト・チームの 15 名の土曜日の試合が満足のいかないものであれば、その場合、パフォーマンスを向上させるためにはどんなメンバーの変更が必要であるかについての論議が長く行われるだろう。

### III 代表チームにおけるキャプテンシー

代表チームは、一般的にレベルの高いプレイヤーによって構成されるので、チームとしては統卒するのが最も容易であろう。最大の問題点はすべてのプレイヤーに同じ線に沿って思考させることであるが、それは実際問題として、組織、動機づけ、施行の問題である。チームとしての組織が整っていなければ、15 名のプレイヤーは各々、自分のことしか考えないようになるだろう。

Roger Uttley は 1970 年、North-East Counties の代表として南アとの試合に選抜されている。North-East Counties のキャプテンはブラッドフォードそしてヨークシャーのチームの Phil Caster が務め、スコットランドのフランカーの Rodger Arneil がフォワードのリーダーを務めている。Roger によると、試合での Rodger のフォワードへの言葉はただ単に「時間が来る。人が来る。」と言っただけのものである。しかし、それは、実際に動機づけとは何であるかを要約するものであろう。というのは、南アのチームは決して並のチームではなく、ゴスフォースのグレイハウンドスタジアムの雰囲気は南アのアパルトヘイト（民族隔離政策）に対する抗議のため騒然としたものであったが、Roger にとって、Rodger の 2, 3 の言葉は素晴らしい暗示になっているからである。

戦術、戦略に関する限り、経験の豊富な代表チームのキャプテンは、他の 14 名のプレイヤーの代弁者である。というのは、ゲーム・プ

ランはプレイヤー全員で論議し、作成するのであるが、キャプテンが最終的にこれらのゲーム・プランを決定し、その決定したゲーム・プランをフィールドで実際に実行に移すからである。1人の人間、つまり、キャプテンに試合の結果についての責任があるとみなすのは極めて容易であろう。素晴らしい成績を収めるチームというのは、特にフィールドではキャプテンの権威を認めるが、ゲームについての論議はゲームの前になされるので、キャプテンの決定は、結局はプレイヤーたちみずからで決定したものであることをよく知っている経験の豊富なプレイヤーたちの集合体であると言える。

キャプテンはキャプテンとしての権威の行使に加え、ゲームの経過中に他のプレイヤーの助言を受け入れる位の寛容さを持つべきであると同時に、決定はキャプテン自身が下さなければならない。Rogerは、1977年のイングランド対フランスの試合でイングランドのキャプテンを務めている。Rogerは次のように、つまり、「この日、イングランドのキッカーであるAlastir Hignellはゴール・キックがあたっていなかった。ゲーム・プランの1つに事前に準備しておいたペナルティからのフォワードの攻撃があった。試合のこの段階で本当に得点が必要であり、ペナルティ・キックを得たとき、Nigel Hortonは、ペナルティ・キックからフォワードみずからの攻撃をやろうと大声で叫んだが、私はキャプテンとしてペナルティ・ゴールを選択した。しかし、そのキックは失敗し、結局、イングランドはその試合を落とした。」と述懐している。イングランドは、3対4でフランスに敗れている。

代表のレベルの場合、下位のレベル、つまり学校、クラブのレベルと同様に、競技能力に秀れたプレイヤーをキャプテンにする傾向がある。しかし、そのプレイヤーに豊富な経験がなければ、首尾よくいくことはめったにないであろう。例えば、1968年、ウェールズのチームは

Gareth Edwardsをキャプテンに選んでいる。彼は弱冠20才の年齢であり、ウェールズのこれまでのキャプテンの中で最年少のプレイヤーであった。しかし、Edwardsの経験不足がハンディキャップとなり、その結果、ウェールズの選抜委員会はJohn Dawesをキャプテンにすることによってキャプテンを最年長のプレイヤーに戻している。当時、DawesはEdwardsより世故にたけており、生活のほとんどすべての面に経験があったと思われる。このことから、キャプテンには競技能力も重要であるが、経験が豊富であることが極めて重要であると言える。

イングランドのチームの場合、他の国よりもキャプテンを時々変更するのが選抜委員会の方針であった。Rogerはインターナショナルの経歴で4名の異ったキャプテン、つまり、John Pullin, Fran Cotton Tony Neary, そしてBilly Beaumontの下でプレイしている。又、Roger自身も又、キャプテンを務めている。イングランドのキャプテンシーの変更のいくつかは負傷が原因であったのであるが、プレイヤーにとって経験に代わるものがないように、キャプテンにも同様のことがあてはまるであろう。

経験はキャプテンとしての特性において重要なものであるが、それ自体では充分ではないであろう。経験は豊富であるが、ゲームへの熱意に欠けるプレイヤーをキャプテンにするのは適切でない。重要なのは、熱意と経験がうまくミックスされていることである。

もともと、どんな類のものであれ、代表チーム、例えば、カウンティ、インター・デストリクト、インター・プロビンシャル、インター・ナショナルのチームを統率する上での問題の1つは、キャプテンとして、多分に、チームのプレイヤーについての知識を十分に持っていないこと、又、チームの長所、短所についての知識が充分でないことであろう。しばらくするとプレイヤーやチームの長所・短所についての知

識が十分に得られるのであるが、先づ、プレイヤーたちを頻繁に、長い間観察してきたであろうところの選抜委員やコーチの助言に頼るのが適切であろう。キャプテンにとって、スカッド・セッションはすべてのプレイヤーについての情報を得るのに役に立つであろうし、いったん、チームの感じをつかむことができれば、キャプテンはプレイヤーが競技する方法に影響を及ぼし始めるであろう。プレイヤー間の相互理解がうまくいくようになれば、代表のラグビーは実際にうまく協調をとることができるだろう。

キャプテンがチームのプレイヤーについての知識を得る最上の方法の 1 つは、遠征であろう。1979 年、5 月から 6 月にかけてのイングランドの日本、フィジー、トンガへの遠征はキャプテンとしての Billy Beaumont にとって極めて有益になっている。その遠征によって、Beaumont はチームを任されているときに集中できる時間を持つことができたからである。Beaumont はチームのすべてのプレイヤーについての知識を得るようになり、プレイヤーはキャプテンの Beaumont についての知識を得るようになったであろう。そして、その遠征によって作り出された関係は、翌 1980 年、年初のイングランドのチャンピオンシップ・キャンペーンの成功とほんの少しではあるが関係があるであろう。同様に、1979 年、North-West Counties が南ア遠征を敢行した際、Beaumont はチームのキャプテンを務めている。この遠征は、多分に、North-West Counties のチームの対ニュー・ジーランド戦での勝利、そして翌シーズンのカウンティ・チャンピオンシップに優勝したランカシャーのチームに重要に関係しているだろう。ランカシャーのチームは、普通以上に頻繁にまとまって練習したり、試合を行うクラブのチームだけにしか生じない相互理解を持って競技したと言える。

1980 年のイングランドのチームでさえ、代表チームのきまりきった雰囲気よりもクラブの雰

囲気に似たものがあつたのであるが、これは、一部にはイングランドのチームが国際試合の期間に行ったラグビーは、その試合の間が短期であつたため、そしてスカッド・セッションのために、イングランドのプレイヤーたちが全体としてまとまることができたからであろう。

#### ま と め

15 人をまとめて、1 つのラグビー・チームをつくりあげる上で最も重要な要素はキャプテンシーの存在である。1978 年、1979 年、1980 年の三度に渡って英国に遠征したニュージーランド・チームに、キャプテンである Graham Mourie が与えた影響について考えてみるだけで、ラグビーにおいてキャプテンシーが如何に重要であるか認識することができるであろう。

理想的には、キャプテンは天性のリーダーであるべきであり、ゲームについての幅広い知識と経験が要求される。

#### 参考文献・引用文献

- 1) Frost, D. Rugby Union Captaincy, Pelham books, 1981.
- 2) W. J. A. Davies, How to play Rugby Football, Constable and Company Ltd, pp. 106—114, 1933.
- 3) I. Donald. Successful Rugby, Pelham books, pp. 174—178, 1968.
- 4) Rutherford, D. Rugby for coach and players, Arthur Barker, limited, 1971.
- 5) Rugby Football Union, A guide for players, pp. 102—106, 1974
- 6) Hopkins, J. Rugby, Cassell, pp. 150—156. 1979.
- 7) Evans, G. Thinking Rugby, George Allen & Unwin, pp. 23—26, 1979.
- 8) Vodanovich, I. Rugby Football the All Black way, orbis, pp. 222—225, 1982.
- 9) Beaumont, B. Thanks to Rugby, Stanley Paul, pp. 177—187, 1982.
- 10) Griffiths, J. the Book of English International Rugby 1871—1982, Collins Willow, p. 384, 1982.